

社報 御霊本宮

第71号

発行者

御霊神社本宮
宮司 藤井利夫
五條市霊安寺町
0747-23-0178

発行日

令和3年
2月1日

飛神信仰



本宮近くに猿田彦

神社が鎮座していま

す。この神社の神紋は

「五瓜に梅鉢」です。

そして境内には梅の木が一本ありま
す。猿田彦神と梅にはどんな関係があ
るのででしょうか。

申年の梅

平安時代中期の天徳四年（九六〇）、
村上天皇が、都で病が流行ったとき梅
干しの力によって人々を救ったと云
われ、また天皇自らも梅干を食べるこ
とによって病を克服したといわれて
います。その年が申年であったことか
ら、申年の梅は縁起物とされ、猿田彦
神と梅が結びついたと考えられてい

ます。

飛梅伝説

福岡県の太宰府天満宮にある飛梅

が有名です。菅原道真が左大臣藤原時

平の讒言によって大宰府に左遷され

るとき、邸内の梅の木に「東風吹かば

匂い起こせよ梅の花あるじなして

春な忘れそ」と詠んだので、その梅の

木が天満宮に飛んだといえます。この

飛梅伝説は鎌倉時代中期の説話集「十

訓抄」に取り上げられています。

飛神信仰

この伝説の背景には「飛神信仰」が
あるといわれています。

元来、神霊は空中を自由に飛び回

り、人々の求めに応じて降臨すると考

えられていました。その代表的なもの

が飛神明です。伊勢の神が各地に飛來

してはその地の守護神となったとい
う云い伝えがあります。このような飛
神信仰と道真の威光とが結び付いた
伝説のでしょう。

猿田彦神社の飛梅

このようにみていきますと、猿田彦

神社に梅の木があるのは偶然ではな

いようです。ここにある梅の木は「飛

梅」であると考えられるのではないで

でしょうか。

とすれば、猿田彦神は飛神として、

この地域の人々の求めによってこの

地に降り立ったということになりま

す。昔の十津川街道は、五條から吉野

川を渡って南下し、現在の野原中学

校、野原小学校を通り、猿田彦神社の

ところで西進、本宮前で南下して丹生

川を渡って現在の国道一六八号線に

出ていました。猿田彦神社のあるとこ

ろは分岐点になっており、ここに道案

内の神が必要であった訳です。そして

旅の安全を祈ったのでしよう。

宇智郡 狛犬めぐり

霊安寺町 御霊神社本宮

大鳥居前に建つ左右の狛犬は同じ
造りですが、口の開閉により表情が変
わって見えます、また一方の狛犬だけ
でも、見る方向によって表情が変わっ
て見えます。阿形は左下から見ると恐
ろしく、正面はかわいく、右から見
ると驚いているように見えます。吽形は
コアラのようです。



初午祭

今昔物語の巻第二十八には、「今は昔、二月の初午は、昔から京中の上中の人々が稲荷詣でだと言って、ござって伏見の稲荷社に参詣する日である」と書かれています。

初午は、二月最初の午の日を指し、この日に初午祭を行う神社が多くあります。これは、伏見稲荷神社のご祭神・宇迦御霊神が伊奈利山へ降りた日が和銅四年（七七一）二月十一日であったとされ、この日が初午であったことに由来します。

今昔物語の表記により、今から八百年以上前の平安時代末期には、初午祭を行ったり稲荷神社に詣でたりすることが慣習化されていたことが分かります。

宇迦御霊神とは

先述したように、稲荷神社の御祭神は宇迦御霊神で食物の神です。古事記

では宇迦之御魂神、日本書紀では倉稲魂命と表記されています。

「宇迦」は「ウケ」（食物）の古形で、穀物や食物を意味します。伊勢神宮の外宮に祀られている豊受大神は、内宮の天照大神の食事を司る神であり、この「受」も「宇迦」と同じ意味を表わします。

宇迦之御霊神は女神と考えられています。記紀には性別を示すような記述はありません。しかし、紀の神武天皇の戊午年、宇陀の地で祭祀を行ったとき「粮の名を厳稲魂女」としたことが書かれています。

また、延喜式神祇人の「大殿祭」の祝詞には「屋船豊宇気姫命」が出てきますが、「この神は稲の霊。俗に宇賀能美多麻。今の世、産屋に辟木・束稲を以て戸の邊に置き、及ち米を以て屋の中に散く類なり」という注釈が付けられています。

「稲魂女」「豊宇気姫」というように食物の神は女神とされています。

御霊稲荷

御霊本宮には御霊稲荷が祀られています。この稲荷社は、もとは境内北側の杜の中に祀られていたといわれています。いつの頃からか祀られなくなり社も消滅したようです。その後、たびたび白狐が目撃されるようになったので神意があるとして、平成十七年に御霊神社稲荷講を結成して社殿を建立し、毎年、初午祭を斎行しています。

平成二十四年に境内南側を整備して社を移転しました。



会員募集

稲荷講では新規会員を募集しています。年会費は五千円です。

お問い合わせ、お申し込みは御霊神社宮司・藤井まで。

八百万の神々

かむなおびのかみ
神直毗神

おのおのびのかみ
大直毗神

いすのめ
伊豆能売

凶事や悪事に関係する神が生まれたと、その禍を直す神として、神直毗神、大直毗神、伊豆能売が生まれました。

「直毗」は、災禍を祓って、もとに戻す、あるいは良くするという思想を神格化したものです。曲がったものを真っ直ぐにするという形で表現されています。

伊豆能売は、古事記に記されていますが、日本書紀には登場しません。古事記でも名前のみが書かれているだけで、他の記述は一切なく、「神」「命」という神号もありません。

「伊豆」は「厳」と考えられ、威力のある巫女であるという説や、女官の神格化した「大宮売命」であるとする説があります。

節分と豆

「節分」は二月三日、そして「立春」はその翌日というのが定着していましたが、今年の節分は二月二日。「節分」と「立春」が例年よりも一日早くなるのは明治三十年以来、一二四年ぶりのことだそうです。

逆に「節分」が二月四日、「立春」が五日と一日遅れたのは、昭和五十九年（一九八四）にありました。

「節分」は来年からは二月三日に戻るとのことですが、二〇二五年から四年ごとに二月二日になり、二〇五七年と二〇五八年は二年連続で二月二日になるとのことです。

日が一日早くなろうが遅くなろうが、「節分」といえば豆まきです。豆をまく理由は諸説ありますが、一般的には「豆は魔滅に通ずる」とされ、中国の医書「神農本草経」に「豆は鬼毒を消して痛みを止める」とあることから用いられるようになったようです。

また、「豆まきには「鬼を打ち払う」意味と、「豆を投げ与えて恵み、静まってもらう」という二つの意味もあるといわれます。

左の絵は、江戸時代の浮世絵師、鳥居清長が描いた「坂田金時と鬼」です。まいた豆に喜んで群がる鬼の様子が描かれています。



本社では毎年、この時期に神前に供えた「福豆」を社頭に置き、参拝者にとって帰っていただいています。今年一月三十日（土）より二月二日まで「福豆」を授与しますが、数量限定のため、無くなり次第終了となります。豆をまいて邪気を払い、健康食品の豆をいただいて、今年もコロナに負けずに過ごしましょう。

「立春大吉」御神札



立春大吉とは、魔除けの御神札のことをいいます。立春大吉という言葉は、鎌倉時代初期の僧道元が書いた十五個の大吉のうちのひとつです。御神札は、立春の日の朝に貼るのがよいとされますが、雨水（二月十八日）までに貼ればよいとも言われています。

一体三〇〇円 社頭にて頒布
限定二〇体
無くなり次第頒布終了します。



ベロリ

今月号より、「狛犬めぐり」を始めます。考えてみれば神社にはいろんな「動物」がいますね。本宮には、犬（狛犬）、狐（稻荷社）、鸞・九尾狐・獬豸（角のある羊・龍・虎・獅子（本殿彫刻））がいます。

これらの動物には意味があり、そこには先人の思いが込められているはずです。その意味や思いを想像するのも楽しいですが、姿かたちや表情を見るだけでも楽しいです。虹梁の両端にも獅子が彫られています。阿形は舌をベロリと出していて、とてもユーモラスです。

これらの彫刻は彫師が彫る場合もあります。ほとんどは本殿建立の大工さんが彫ったのだとか。虹梁の獅子を彫った大工さん、いろんな思いを込めて彫ったのでしょね。ベロリと舌を出しながら。

Instagram @goryohongu
Twitter @goryohongu




#御霊本宮 #goryohongu を付けて投稿してください。
公式ホームページ
<http://goryojinja.or.jp>

日本書紀にみる

十代 宗神天皇 (四)

倭迹迹日姫命は仰ぎみて悔い、どすんと坐りこみました。そのとき箸で陰部を突いて死んでしまわれました。それで大市に葬りました。当時の人は、その墓を名づけて箸墓と呼びました。

その墓は昼は人が造り、夜は神が造りました。大坂山の石を運んで造りました。山から墓に至るまで、人民が連なって手渡しにして運びました。当時の人は歌いました。「大坂山に人々が並んで登って、沢山の石を手渡ししていけば渡せるだろうかなあ。」

冬十月一日、群臣に詔して、「今は、反いていた者たちはことごとく服した。畿内には何もない。ただ畿外の暴れ者たちだけが騒ぎを止めない。四道の將軍たちは今すぐに出発せよ」と言われました。

二十二日、將軍たちは共に出発しました。十一年夏四月二十八日、四道將

軍は地方の敵を平定した様子を報告しました。この年、異俗の人達が多勢やっけて国内は安定しました。

十二年春三月十一日、詔して、「私は初めて天位を継いで、宗廟を保つことはできたが、光りも届かぬところがある。徳も及ばぬところがある。このため陰陽が狂って、寒さ暑さが乱れている。疫病が起こり、百姓は災いを被っている。それを今、罪を祓い、過ちを改めて敦く神祇を敬い、また教えを垂れて荒ぶる人どもを和らげ、兵を挙げて服しない者を討った。だから官に廢れた事なく、下に隱遁者もない。教化は行き渡って、庶民は生活を楽しんでいる。異俗の人々もやっけてきて、周圀の人までも帰化している。このときに当って、戸口のことを調べ、長幼の序、課役の先後のことを知らせるべきである」と言われました。

秋九月十六日、初めて人民の戸口を調べ、課役を仰せつけられました。これが男の弭調、女の手末調です。

これによって天神地祇ともに和やかに、風雨も時を得て百穀もよく実り、家々には人や物が充足され、天下は平穩になりました。そこで天皇を誉め讃えて、「御肇国天皇」といいます。十七年秋七月一日、詔して、「船は天下の大切なものである。今、海辺の民は船がないので献上物を運ぶのに苦しんでいる。それで国々に命じて船を造らせよ」と言われました。

(次号につづく)

男の弭調、女の手末調とは

律令制以前の大和朝廷時代の税のことで、記紀に、崇神天皇のとき男には弓弭調を女には手末調を課したとあります。弓弭調とは狩猟による獲物を税として貢納させたものと考えられています。手末調とは、女子が織った布帛(織物の総称)を献上させたものです。

万葉の花たち

ひ(ヒノキ)

いにしへにありけむ人もわが如か
三輪の檜原に 挿頭折りけむ
柿本人麿歌集(巻七・一一一八)

「わたしと同じように、昔の人もこの三輪の檜の枝を髪にさして楽しんでいたのかも」

挿頭は、髪飾り、



かんざしのことです。万葉人は、梅の花やモミジをはじめ檜の小枝まで、いろんなものを髪飾りにしていたのですね。

三輪山のふもとにある檜原神社は、今は赤松の林になっていますが、万葉の時代は歌のとおり、檜の茂った原だったことでしょう。

檜は、この木をこすると火が起こることからヒノキの名が付いたといわれています。